

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2016

課題番号：15K16698

研究課題名(和文)一人称自伝小説における意識描写

研究課題名(英文)Representation of Consciousness in First-person Autobiographical Novels

研究代表者

中尾 雅之(Nakao, Masayuki)

鳥取大学・地域学部・講師

研究者番号：00733403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、近年の物語論・文体論の知見を基に、一人称自伝小説の意識描写を分析する理論的枠組みを再考・再構築した。1.自伝小説における語りの「媒介性」の概念と語りモードの問題を再認識しつつ、物語る「私」と体験する「私」の内的緊張関係が、回想形式の語りに反映される過程を図式化した。2.再現される意識のレベル(知覚・概念)とその言語形式の違いに着目することで、登場人物の体験の「直接性」をより具体的に記述できる方法を提示した。3.この枠組を基に、ディケンズとサッカレーの自伝小説を扱い、登場人物の印象的な体験が、異なるレベルの意識描写を通して、いかに追体験的に再現されているかを分析した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to reconsider and reconstruct the framework for analyzing the representation of consciousness in first-person autobiographical novels based on recent studies of narratology and stylistics. Firstly, with due attention to the concept of 'mediacy' in first-person autobiographical narrative and its narrative modes, I schematized the process of how the internal tension between narrating and experiencing selves is reflected in the retrospective narrative. Secondly, I introduced the method which enables us to describe more accurately a character's immediate experiences, taking account of the levels of consciousness represented (perception and conception) and their different linguistic features. Finally, using this framework, I analysed the autobiographical novels of Dickens and Thackeray and how their characters' memorable experiences are linguistically represented through the different levels of consciousness, with the illusion of immediacy.

研究分野：文体論、物語論

キーワード：一人称自伝小説 意識描写 物語る私・体験する私 意識のレベル(知覚・概念) 自由間接思考 ダイクシス表現 追体験 物語論・文体論

1. 研究開始当初の背景

小説における意識描写の技巧について、これまでに多くの文体論者や物語論者は、自由間接思考 (Free Indirect Thought、以下 FIT) といわれる言語形式に注目してきた。FIT とは、語り手が作中人物の意識を通して出来事を描写する言語形式のことである。つまり二つの表現主体 (語り手と作中人物) の視点が混在した言語形式と言い換えることができる。

FIT に関する先行研究には、2つの動向が見られる。1つは、FIT が扱われている作品の多くが、3人称小説に限られていることである。その原因の1つとして、1人称小説 (特に自伝小説) における2つの表現主体の存在が未だに明瞭な形で認識されていないことが挙げられる。実際、1人称自伝小説においても、3人称小説の「語り手と作中人物」の関係に相当する2つの表現主体 (語り手としての「私」と作中人物としての「私」) が存在する。そしてこの2つの「私」の間で視点の混在した意識描写 (FIT) が出てくる。物語論者である Stanzel (1984) は、この時空間の異なる二つの「私」を「物語る私 (narrating self)」と「体験する私 (experiencing self)」と呼び、2つの「自己」を概念的に区別している。物語る「私」は、回想中、体験する「私」の意識を通して、当時の自分の体験を再現することができる。その際、2つの「私」の間にみられる内的緊張関係 (心理的葛藤) が、物語る「私」の再現する意識描写に強く反映される。しかしながら、多くの先行研究が、この2つの「私」の緊張関係を強く意識することなく、1人称自伝小説に見られる意識描写 (FIT) を扱っている。批評家たちの中には、以前からこの点を指摘している者がいるが、未だに自伝小説の意識描写を分析する際に、等閑視されがちである。

もう一つの動向は、多くの先行研究が FIT という言語形式の中で、知覚レベルの意識 (作中人物の外の世界への感覚・知覚) と概念レベルの意識 (作中人物の内面にある感情や思考) を区別することなく扱っていることである。Fehr (1938)、Brinton (1980)、Banfield (1982) など早くから両者の言語形式の違いに注目しつつ意識描写の分析をしているが、ここでも先行研究で扱われている作品のほとんどが3人称小説に限定されている。最近では Pallarés-García (2012) がオースティンの3人称小説『エマ』の意識描写を知覚と概念レベルに分けて分析している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英国1人称自伝小説において、時空間の異なる2つの「私」(物語る

「私」と体験する「私」) の概念的な区別を再認識し、回想形式の語りの中で、二つの「私」の内的緊張関係が視点の交錯を通してどのように表現されているかを考察することである。本研究では、特に語り手としての「私」(物語る「私」) が、主人公としての「私」(体験する「私」) の意識をどのように再現 (represent) しているかを検証する。意識描写 (特に FIT) を分析する際、物語る「私」が、体験する「私」のどのレベルの意識 (感覚・知覚・感情・思考等) を再現しているかに注目する。

上記の点をふまえた上で、1人称自伝小説の意識描写を分析する理論的枠組みを再考・再構築する。この枠組を用いた事例研究として、ディケンズとサッカレーの自伝小説における意識描写を考察し、それぞれの作品において、物語る「私」がいかに自己の体験や記憶を創造的に生み出しているかを、その言語形式に着目して、分析・記述する。

3. 研究の方法

本研究の主な研究手順は以下の通りである。

(1) 1人称自伝小説における回想のスキーマ (REMEMBERING AS RECOUNTING / REMEMBERING AS RELIVING)、語りのモード (teller/reflector mode)、語り手の媒介性 (mediacy/immediacy) の相互関係を整理しながら、2つの「私」の視点の交錯が、回想形式の語りに反映される過程を図式化する。それぞれの表現主体 (物語る「私」と体験する「私」) の視点を読者に喚起させる言語指標として、さまざまな種類のダイクシス表現 (例: 人称、時制と相、場所・時間を表す副詞句) に着目する。

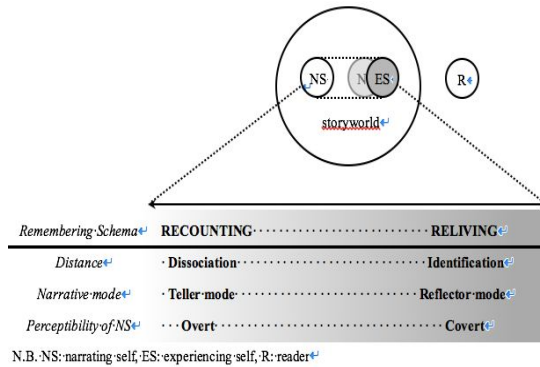
(2) 物語る「私」が、回想中、体験する「私」のどのレベルの意識 (知覚・概念) を再現しているのか区別するために、異なるレベルの意識の言語指標をそれぞれ示す。そうすることで、物語る「私」が過去の体験をいかにリアル (追体験的に) に再現しているのか具体的に記述する方法を設定する。

(3) 上記の観点をふまえながら、1人称自伝小説の意識描写を分析する理論的枠組みを再構築する。事例研究として、ディケンズとサッカレーの自伝小説 (『大いなる遺産』と『ヘンリ・エズモンド』) に見られる意識描写を分析する。

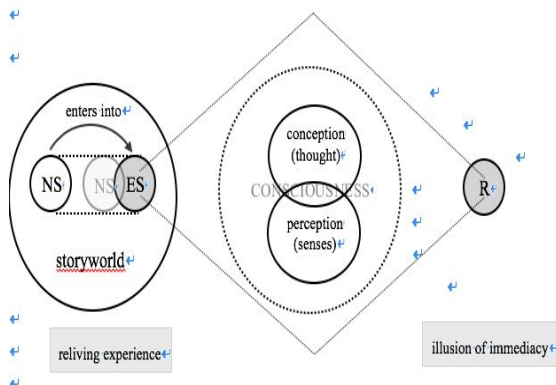
(4) 小説における意識描写を、通時的な観点から考察する環境を整えるために、18世紀・19世紀の英国1人称自伝小説のテキストのデジタル化を行う。

4. 研究成果

(1) 一人称自伝小説の意識描写を分析するための理論的な枠組みを、暫定的ではあるが、再構築した。この枠組の具体的内容は、以下の通りである。回想形式の語りの中で、物語る「私」と体験する「私」の視点が交錯する過程(つまり、FIT が生まれてくる過程)を、語りのスキーマ・モード・媒介性に関連付けて図式化している。



FIT が再現する異なるレベルの意識描写(知覚・概念)を、represented perception と represented thought に区別し、それぞれの言語指標(特にダイクシス表現)を提示している。物語る「私」が、体験する「私」の知覚・概念レベルの意識及びその相互作用を描くことを通して、当時の体験をより直接的に(immediate)に再現(追体験)していく過程を、特に語りの媒介性と関連付けながら、図式化している。



(2) この枠組みを用いた事例研究(ディケンズの『大いなる遺産』とサッカレーの『ヘンリー・エズモンド』、『バリー・リンドン』)を、国際文体論学会(Poetics and Linguistics Association)の年次大会(2015、2016)で発表した。テキスト分析では、例えば、子供(体験する「私」)にしか知覚できないような独特の世界観(しかし当時の自分にはまだ言語化することができないような世界観)を、大人の「私」(物語る「私」)が自分の言語表現を通して、どのように再現しているかを議論した。ここでは知覚主体(体

験する「私」と言語主体(物語る「私」)の違いに注意するとともに、子供時代の知覚(represented perception)がどのように概念・思考レベルの意識(represented thought)へと展開していくのかを分析した。また物語る「私」の「追体験」のプロセスを、読者がどのように受容(錯覚)していくのかを図式化して示した(「直接性の錯覚」(the illusion of immediacy))。最終的に、それぞれの発表内容は、学会の Proceedings に掲載された。

(3) 電子テキストの作成

Project Gutenberg 等のフリーサイトから、18 世紀・19 世紀の英国一人称自伝小説(例: デフォー、スウィフト、スターン、スモレット、ブロンテ姉妹、ディケンズ、サッカレー)をダウンロード・編集して、電子テキストを作成した。AntConc や Casual Conc 等のコンコード分析ソフトを使用して、通時的・量的な観点からダイクシス表現等の検索ができる環境を整えた。

<引用文献>

- Banfield, A. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*, Boston: Routledge and Kegan Paul, 1982.
- Brinton, L. “‘Represented perception’: A study in narrative style”, *Poetics* 9(4), 1980, 363-381.
- Fehr, B. “Substitutionary narration and description: A chapter in stylistics”, *English Studies* 20, 1938, 97-107.
- Pallarés-García, E. “Narrated perception revisited: The case of Jane Austen’s Emma”, *Language and Literature* 21(2), 2012, 170-188.
- Stanzel, F. K. *A Theory of Narrative*, trans. C. Goedsche, Cambridge: Cambridge University Press, 1984 [1979].

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Masayuki Nakao, “Representation of a self-deluded mind in the first-person picaresque novel: The case of Thackeray’s Barry Lyndon”, *PALA 2016 Proceedings online*, 査読有, 2016, 1-13.

Masayuki Nakao, “Representation of consciousness in first-person autobiographical novels, A case study: Dickens’ *Great*

Expectations and Thackeray's Henry Esmond", PALA 2015 Proceedings online, 査読有, 2015, 1-15.

[学会発表](計2件)

Masayuki Nakao, "Representation of a self-deluded mind in the first-person picaresque novel: The case of Thackeray's Barry Lyndon", Poetics and Linguistics Association, 2016年7月27日, Cagliari, Sardinia, Italy.

Masayuki Nakao, "Representation of consciousness in first-person autobiographical novels, A case study: Dickens' *Great Expectations* and Thackeray's *Henry Esmond*", Poetics and Linguistics Association, 2015年7月16日, Kent, UK.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中尾 雅之 (NAKAO, Masayuki)
鳥取大学・地域学部・講師
研究者番号: 00733403